

日本福音主義神学会二〇周年の

回顧と展望

佐布正義

一、誕生の契機

兄弟たちよ。わたしが以前あなたがたに伝えた福音、あなたがたが受けいれ、それによって立ってきたあの福音を、思い起こしてもらいたい。(パウロ、一コリント一五章一)。

日本福音主義神学会の誕生は、第二次世界大戦の終結から四半世紀を経た、日本のプロテスタント教会「福音派」の神学的自己反省をその契機と視ることができよう。回復された自由の下で、ひたすら福音を伝えることに精力を注ぎ、そして、その福音によって教会を建てることに没頭していた「福音派の諸教会」のリーダーは、宣教と牧会、信仰生活の典拠としての聖書啓示の理解に大きな振幅を見出し、聖書観に著しい違いを宣教活動の中にも感じ始めていたのである。確かに、日本のキリスト教界は、内外の情勢に動かされて岐路に立たされていたと言える。当時、聖書観における動揺は世界的規模であり、従ってその影響は福音の「宣教地」の域を出ない日本のキリスト教界を巻き込まずには置かなかった。「今は、聖書を神の啓示とみなす伝統的な聖書観が大きく崩れようとしている危険な時代

である。もしこの点で崩れ去るなら、キリスト論も教会論も根本的に破壊されてしまう……」^①という危機意識がエネ

ルギーとなって働いたことが明らかである。既に、超教派的宣教活動（福音クルセード等）の中においても、この事柄は強く意識され、福音主義を標榜する群の「粹」が明確にされる必要が叫ばれていた。こうした宣教大会を共通の場として、先ず、「聖書は誤りなき神のことばである」とする「聖書信仰運動」（JPC）が生れ、着実な活動を展開していた。そしてこの運動に関わる人々の間に、「福音主義神学会」誕生の胎動が始まったことは、必然的とも思えるが、神の摂理によるものであろう。

福音派諸教会の体質で、神学的反省の対象となるもう一面は、「エクソダス志向」であろう。圧倒的な非キリスト教的文化、宗教、思想の領域において、福音を伝達する宣教者は、この罪の世から脱出することによって、救いを明確にすることを強調する。その結果、エクソダスを果たした個々によって成る地域教会は、その属する社会における関連性（レラヴァンス）を欠く体質を当然の事と考えていた。この世としての社会に対して常に働く対立の意識が「教会」とその属するコミュニティを分離する二元論的な生き方を生み出す原因であった。旧約におけるイスラエルの民が「エクソダス」によって開放された結果、荒野を放浪する生活を余儀なくされた状態を、日本のエクレシア（教会）が常態と考えるようになりつつあった。日本の福音派は「旧約の民」から「新約の教会」へと脱皮する必要があるたのである。「このままでは、福音主義的グループがキリスト教会において指導的な役割を演じ、社会的影響力を強めていくことは不可能である」という自覚が、現世の諸問題と積極的に取り組む神学的研鑽の場を設ける機運となったと言えよう。福音派の諸教会は、「世俗」からの分離を「聖」とする教理の強調から、この世も神の創造に成る、神の支配の領域として把えることを怠る傾向を内包している。また、社会におけるマイナリティーの視点から、この世界を視る体質を持っている。そして、その責任の一部は牧師にあることも明らかであった。「ある者は、牧師は美しいゲッ

トーの住人であってわれわれとは縁のない話であると考え、安易な二元論に従って生きるようになります。他の者たちは、その観念的な倫理によってみずからを傷つけ牧師を責めます。そこには現代における状況と人間が見失われており、やはり現代へのメッセージとはなっていません。それは、メッセージが個人の霊的救済に終始しているときも同じで、時代や社会との関連性を失った個人的メッセージは、現実に対してはあまり意味をもっていません」^④という教役者の認識があった。教会（エクレシア）の本質の理解の欠落から生じる不毛性は、牧師・教師の責任でもあるという反省が神学会結成を促したと言えよう。

一、その前提

もしあなたがたが、いたずらに信じないで、わたしの宣べ伝えたとおりの言葉を固く守っておれば、この福音によって救われるのである（Iコリント一五章二）。

かくて神の摂理のうちに、一九七〇年四月二七日の設立総会において誕生を見た、日本福音主義神学会は、たった一つの神学的規準「第三条（立場）」をもって発足した。

「本会は聖書の十全靈感を信じる福音主義キリスト教の立場に立つ」。

神学会の結成に当って、依拠する究極の権威を「聖書」に置くことは共通の理解であったが、神学の方法論における「限定（聖書の十全靈感）」に関しては論議が行なわれた。一九七〇年一月二六日（月）東京練馬バプテスト教会において行われた発起人会では、日本基督教団所属のF氏が、学会の活動に「粹」を設けることは学問の自由を制限す

ることである、として席を立たれたことを想い起す。この時から日本福音主義神学会は、一つの制約を自らに荷したのである。しかし、この制約は「福音主義」の本質に関わる枠であって、学究的自由の制限ではないと理解されているのである。

「すべての神学者は、一定の方法によって神学する。また特定の方法論を公表しない人であっても、例外ではない。それぞれの場合、主題の研究に先だつてある種の前提がある」とG・ヴィングレンは言明している。「福音主義神学」には、漠然とはしていたが、前提（プリサポジション）が存在していた。それを明文化することが第一の責務であったのである。

それより十年前に、エドワード・J・カーネールは、正統主義神学の弁証において、その真理体系の基礎は「生ける、記された神のことば（聖書）」に「限定（リミッツ）」されねばならないと言明し、その本質の理解に関しても「十全靈感（プレナリー・インスピレーション）」によって表わされている神学的方法を挙げている。福音主義神学は、この点と方法論において正統主義と軌を一にしている。このプリサポジションは、神学会の目的を達成する前提であることを規約に明示している。

「第四条（目的） 本会は前条の立場にたつて、神学的研究を行ない、相互の交流をはかり、教会の健全な成長と発達に奉仕することを目的とする」。

更に、本学会の事業の一つである「会誌」の創刊号において初代理事長矢内昭二氏は、その事業の根本的確信を三項目にまとめて明らかにし、その軌道を設定している。

一、聖書の十全靈感を信じる福音主義キリスト教は、真理である。

二、福音主義キリスト教は、厳密な学問的解明と弁証を要求し、またそれが可能である。

三、健全な教会の形成と強力な福音宣教のため、福音主義キリスト教神学は、必須である。

パウロは靈感によって、大胆にも「わたしの宣べ伝えたとおりの言葉」を「福音」とし、「この福音によって救われる」と宣言することを許されている。「福音主義キリスト教は、真理である」と宣言できるとすれば、神の権威によってのみ可能であり、その所在である聖書を聖書が主張する通りに受け止める時に、その担い手である福音主義キリスト教は自己を「真理」であるとするのが許されよう。

しかし、神学活動に前提を掲げたものの、「福音主義キリスト教」の理解は必ずしも明白ではなく、神学方法も多様であった。従つて、それからの十年にわたる神学会の営みは、専ら、自己のアイデンティティーの確立のために向けられたように思う。学会の活動は一、研究会の開催、二、講演会の開催、三、会誌の発行、四、その他の諸活動、に限定されているが、その全体の流れを「学会誌」が忠実に記録として残している。そこで創立より十周年記念研究會議と記念論文集十号までを前期とし、それより本号までを後期とする学会の歩みを、会誌を通して振り返って見たい。筆者はこの稿の依頼を受けて、創刊号から十九号に至るまで、もう一度丹念に読みなおす機会を与えられ（余儀なくされ）て感謝に堪えない。そして、これはなんと貴重な資料であろうかと認識を新たにさせられているものである。周知のように、記録されない事柄は事実と認められないような不確実な人間の営みにおいて、神が志を与え下さり「福音主義神学」を刊行し続けて来られた編集委員の方々の奉仕に対しても感謝を表明したい。第四号の編集に当られた村瀬氏は編集後記で「これで二号雑誌で終わる心配はなくなった」と述べ、この働きが軌道に乗ったことを喜んでおられるが、歴代の編集委員のご努力により、日本のキリスト教界の歴史が綴られたことを心から喜ぶものである。

三、「福音主義神学」に視る神学会の歩み

その一号より十号までの論文・研究発表は、聖書(神)学の領域におけるものが圧倒的に多い。福音主義を明確にする試みである。

(一) 論文(十八編)

旧約関係(九編)

- 「エゼキエル書に於ける神——語りかける神——」(服部氏) 一号
 - 「旧約聖書神学の方法」(舟喜氏) 三号
 - 「詩篇における永遠のいのちの思想」(西氏) 三号
 - 「ウガリトと旧約聖書」(津村氏) 六号
 - 「詩篇93篇考——ウガリット文学の光との関連で」(油井氏) 七号
 - 「旧約の時」(鍋谷氏) 九号
 - 「旧約における夢と啓示」(服部氏) 一〇号
 - 「増幅法による旧約研究の試み」(大山氏) 一〇号
 - 「詩篇46・二一八の文学的構造について」(津村氏) 一〇号
- 新約関係(七編)

「マタイ福音書における定式引用句の聖書神学的研究」(小林氏) 二号

- 「共観福音書における神の国」(村瀬氏) 四号
 - 「パウロの『主の晩餐』の定型の起源に関する一考察」(村上氏) 八号
 - 「ルカの行伝演説記述」(石丸氏) 九号
 - 「マルコの福音書二・三二—三五をめぐって」(宮村氏) 一〇号
 - 「ペテロの手紙第一・三—19の解釈」(村上氏) 一〇号
- 「The Authenticity of the Parables of Jesus」(クイン氏) 一〇号
- 聖書論(二編)

- 「神の言としての聖書——福音派の証し——」(ルニヤ氏) 二号
- 「福音派聖書論の文献と動向」(宇田氏) 一〇号

(二) 研究発表・講演記録(八編)

- 「現代の神学的状況における聖書の神学の課題」(宇田氏) 一号
- 「あなたにとって旧約聖書とは何か?」(榊原氏) 二号
- 「イザヤ40章—55章全体より見た主のしもべ像」(鍋谷氏) 四号
- 「聖書の権威と伝道」(宇田氏) 五号
- 「五書の解釈をめぐって」(榊原氏) 九号
- 「旧約批評学と榊原論文」(津村氏) 九号
- 「新聖書注解『モーセ五書緒論』についての所感」(千代崎氏) 九号
- 「ルカによる福音書——行伝における『使徒』(αποστολος)」(五島氏) 九号

以上、聖書学の領域の論文十八編、研究発表・講演記録八編に対して、組織神学、教会史、宗教学、実践神学の領域における発表は次の通りである。(二十編)

- 「カルヴァンの聖餐論」(金田氏) 八号
- 「ジョン・ウェスレーの聖餐論」(岩本氏) 八号
- 「『ベン・シラの知恵』の和訳に寄せて」(村岡氏) 八号
- 「初期敬虔主義についての序論的考察」(横山氏) 九号
- 「聖化論の今日の問題」(小林氏) 一〇号
- 「ローマ帝国の迫害とクリスチャン殉教者の信仰」(泥谷氏) 一号
- 「抵抗権—宗教改革上の一考察」(丸山氏) 五号
- 「古代ローマ本来の宗教意識と初代教会が受けた迫害との相関」(湊氏) 六号
- 「ローマにおける自由人と奴隷の実態」(湊氏) 一〇号
- 「教会史に観る『教会と国家』—序論的考察」(丸山氏) 一〇号
- 「ダルマとロゴスの周辺」(久保田氏) 五号
- 「教会の死と復活—現代へのメッセージを失ったキリスト教—」(泉田氏) 二号
- 「牧会カウンセリングの聖書の根拠」(小助川氏) 三号
- 「日本人の思惟構造と福音宣教の伝道方法」(山中氏) 六号
- 「キリスト教政治 (Christiana politica) について—序論的考察」(高力氏) 八号
- 「愛の再検討」(堀越氏) 九号

- 「福音と文化と日本文学」(清水氏) 一〇号
- 「牧会カウンセリングの方法に関する一試論」(小助川氏) 一〇号
- 「教派形成の展望」(高橋氏) 一〇号
- “Considering the JET’Ss Ten Years of Service to the Church” (スローグランド氏) 一〇号
- 「シンポジウムに関しては、「日本伝道と日本人の思惟構造」と「創世記—三章の解釈をめぐって」が四号に記録されている。

四、神学研究会議から

創立十周年を記念して行なわれた第一回神学研究会議は、前半十年の歩みを総括する性格を持つと同時に、それからの後半の活動に対する方向を示唆するものであった。主講師カール・ヘンリーの講演「啓示と文化」は神学会に対して、宣教と神学の「コンテクスチュアリゼーション」を提案した。教会は「文化を単に人間の社会的活動の副産物の程度のものでしてではなく、あくまでも創造論との関連においてみてゆこうとする」ものでなければならぬ。また啓示の問題においても、「文化は……啓示伝達上の不可避なコンテキストとみる……」コンテクスチュアリゼーション論に注目を向けられた。内に自己認識を欠く福音主義は「新解釈学の中にみとめられる危険の中に足を踏み込んでいくように見える」とヘンリーは警告をしつつ、主知主義や客観主義の立場を避けつつも、啓示の文化への受肉を実存論的方向に展開しようとする傾向を指摘した^⑦。

実に、この十年は、啓示(聖書)理解のための釈義原則を探り、方法論を模索する時期であった。そして、福音主

義の立場に立って聖書釈義原則は、いまだに確立されてはいないが、福音主義諸教会の牧師、教師が神学的活動に自ら参与した時期であると言えよう。既成の教義を鵜のみにする体質から、実存主義の方法論を模倣するのみでなく、自らの手で福音主義的神学のパラダイムを探り始めたことに大きな意義があったと言える。

第二回神学研究会議（十五周年記念）は、後記（十年）の中間に立てたエベネゼルとも言えよう。この会議においては、靈感、権威、無謬性、不可謬性、無誤性などの問題が論じられ整理されると共に、その実践面における適用として、釈義から説教への発展過程が検討されている。「今日における福音主義聖書論」の主題が示すように、なお聖書論においてのアイデンティティーを探ってはいないが、コーディネーターを務めた服部氏は「何を内容的に意味しているかに関して……ある程度の整理ができたのではないか」と述べておられる。

五、後期十年の歩み

第二回神学研究会議後の神学会の活動を学会誌によって見ると、聖書学（神学）から実践神学の領域へ向う傾向がうかがえる。一六号における論文は「生と死」をテーマとして取上げ、「パウロにおける弱さと力」（安納氏）、「生命についての神学的理解の一試論」（上沼氏）、「クリスチャン・ライフの神学」（高田氏）、「実践的神義論をめざして・痛みの神学的解釈と牧会的応用」（中島氏、中島氏）……のように研究会議の総括が反映している。

学会誌一七号は、特集「釈義と説教」とし、論文においては「福音主義の聖書解釈—その方法論の確立をめざして—」（津村氏）、「聖書解釈の基盤と方法（論）をめぐる」（宮村氏）、「日本の学生伝道」（片岡氏）を取り上げ、また、第三回神学研究会議の総評を行なっている。コーディネーター丸山氏は、福音主義聖書論の前提の確認において、「神のことばの」「源泉に帰る」ことによって「そのみことばの下に自分を置き、そのみことばに聞き従うという信仰者の姿勢」を持つこと、「聖書の福音は、そのまま福音として伝える」——「みことば楽観主義」に立つこと、「啓示としての神のことばは」神の側からの人間に対する「適応」（Accomodatio）として受け止められるべきことを再確認した。

プロポジショナルな啓示である聖書は、特定の方法論によって理解しつくす性質のものではなく、「聖書のことばを信頼して、それを正面から学ぶ」（舟喜氏）ため、「釈義における聖書批評学の位置づけ」（津村氏）が最大の課題として挙げられている^⑧。また、「聖書を、その書かれた背景に属する他の文献と比較しつつ、両者にある類似性を認めながら、同時に区別、つまり、聖書事態の周囲のものに対し際立つ、特徴あるメッセージを聞こうとすること」を基本姿勢として、「聖書の歴史性を無視することなく——啓示における超自然を見失うことなく、啓示と歴史からの道」（宮村氏）を採ることが提唱されている。

学会誌一八号は「教会論」を主題とした特集を企画し、日本福音主義神学会も「我は聖なる公同の教会、聖徒の交わりを信ず」（巻頭言・理事長丸山氏）という使徒信条の告白と真剣に取り組むべき時の到来を告げている。キリスト教神学の体系の中でも、確かに「教会論」はなおざりにされて来たと言えよう。「正統主義神学が教会論に、終末論の事前で形式的に論ずるといふ付加物的意義しか与えなかったこと」に対して、「敬虔主義が……教会を構成する個人に注目するあまり、教会論の神学的基盤を弱めたこと」、また「十九世紀の自由主義神学が教会をユートピア的な神の国の地上における実現の手段として位置づけたこと」（丸山氏）などの理由から、教会とそのミニストリーに関する神学的な弱さが露呈された。特に福音主義神学の立場に立つ陣営の教会観は多様であって混迷しており、早急な神学的

取り組みが必要であろう。

論文「教会の伝統についての一考察—日本における教会形成の課題として—」（吉岡氏）においては、著者自身はウエストミンスター信条に立つが、「諸教派がそれぞれの伝統のルーツに注目して、互いにその特性を尊重しつつ、新しい展開をとげ、わが国の教会形成の次の世代への継承を目指さねばならない」ことを提唱する。ここにおいてはまた「聖霊の自由と制度とは乖離するという認識を克服し、制度こそ自由を保証し表明するものとして、改革され続けていく教会を目指す」ことを勧められている。「日本における福音主義教会が、キリストの公同の教会の肢として形成されるために、キリストの教会が継承してきた福音と福音理解の伝統が神学的に検証され、その上に教会形成がなされねばならない」と神学会はチャレンジされている。

他方、あらゆる面で異なる視点を持つ論文、「変革の力としての『一つの教会』—福音が形成するエキュメニズム—」（舟喜氏）においては、G・E・ラッドの言う「新約聖書には、教会の一体性がなんらかの外的組織や教会制度によって表現される、という考えを示すものはない」を引用し、「『制度によらない一つの教会』は聖書の事実であり、歴史の事実である」と結論し、この表現は「初期教会についての一つの描写であるよりは教会の定義として受けとめられる」とする。かくて「神の主権性を極限まで認める教会のあり方」として「一つの教会」の認識をアピールする。「かつてないほど世界が一つであることを時代そのものが認めさせられている現在、教会は一つであることをかたつてないほどに表現しなければならない」（舟喜氏）という提案に、日本の福音主義神学に立つ教会は応答を迫られることになったのである。これらの論文で教会の本質について論じられるかたわら、一八号においては、「宣教的な地方教会形成の一試論」（河野氏）や、「教会における小集団活動とその信徒リーダー養成—聖書と歴史による一考察—」（尾形氏）など、実践神学の領域と重なる教会の奉仕の側面が論じられるようになった。

学会誌一九号は、京都において開催された第四回神学研究会議にちなんだ特集号となり、テーマは「福音と文化」となった。従来の福音主義のアイデンティティーの問題から、福音の吟味とその対象に視点を据え、福音の文化脈化（コンテクスチュアリゼーション）が研究の課題とされた。主論文六編は、それぞれ研究会議で発表されたものをまとめたものである。

『「福音と文化」の諸相—日本プロテスタント史の一面—』（小野氏）は、「日本キリスト教史の文脈で『福音と文化』がどのような接点を持ち、相互に刺戟と影響と変容をとげたか」を明らかにしようとする。『「日本教」の吟味』（宇佐神氏）では、「日本教的世界というものが自己の同一性を頑強に保ちつつ、外来の諸価値を取捨選択的に吸収同化していく……それが『天皇制』によって統合されている世界である」（橋本氏）ことを明らかにし、そこに生きる人間を精神分析の手法により描出する。それによって、今日の教会の負う課題を浮き彫りにする。「ポスト近代の日本主義—世界観と文化脈化—」（稲垣氏）は、「聖書的世界観から見て、日本文化と思想の根底に明瞭な世界観—日本主義—が存在することの理論的根拠とその内実」を明らかにし、「……その双方にまたがる事実の間の翻訳、そして新しい意義の創造……文化脈化に具体性を与える方法論を提起」している。

一方、聖書啓示も所与の文化の中に、文化を媒介として起こっている事実を明確にするべく、「旧約聖書における信仰と文化—イスラエルの後退（護教）と前進（宣教）—」（服部氏）と「新約聖書における福音と文化」（内田氏）が取り扱われている。前者において「文化」は、創造の秩序と契約のもとにおいてよりも、「贖罪契約下におけるもの」として扱い、「神の民」がその使命の達成のために「異教的文化」とどう対決したかを画く。後者では、福音がいかに既成の「文化」の「枠」を動かし、変化を与えたかを明らかにし、「文化から遊離せずに……深く根差さなければならぬ」。しかもそれを絶対化神格化せず、むしろ相対化し、福音によって変えていくことを提唱する。こうして、「現

代日本の宗教的・思想的状況のなかにおける『福音と文化』の問題を歴史的に、現代思想として、また宣教論的に研究し、さらに旧新約の示唆を検討して与えられた洞察は、今後どのような方向に展開されるべきであろうか」(コ―ディネーター)という課題が「福音と文化・方向の模索」(佐布)によって明らかにされている。

これらの論文とは別に「福音と文化―文化のフェティシズムと福音宣教―」(荒井氏)、「国家と諸権力、そして教会―聖書による一考察―」(倉沢氏)、「知恵とヤーウィズム―伝道の書二二章九―一四節をめぐる―」(佐々木氏)、研究ノートとして「福音主義からみた東方正教会―キリスト教受容千年祭を迎えたロシアをめぐる―」(安村氏)は、それぞれ、この特集テーマに専門的な深さと広がりを加えている。

こうして、学会誌を対象とし、また手元に保存されている資料を参考にしつつ、二十年に渉る日本福音主義神学会の歩みを振り返って、強く感じさせられた事は、「記録・文書」の価値の偉大さであった。神が歴史の中に介入されて啓示された事柄を、「聖書」として文書化することに「こだわられた」御旨に今更のように感謝するものである。日本福音主義神学会は、自らに荷した使命、神学の研鑽を行うと同時に、その足跡を日本のキリスト教界と世界の関わりの中で記録に残し、「今日と明日」のキリスト教会のあり方を見つめる資料としなければならぬと思う。

この回想の中で、各部会の活動に触れることが出来なかったが、学会誌はその情況をも記録にしている。論文、研究発表のすべてを取り挙げることさえ出来ないばかりか、「書評」として取上げられている二三冊、その外にも多くの著書紹介、著者の情報、国際的なキリスト教関係資料などの貴重な記録にも触れられなかったが、学会誌の扱った全文献のビブリオグラフィが出来れば幸いである。

もう一つの点は、聖書啓示理解の方法論として、歴史的、文献的、編集的批評などが論じられるが、聖書も一般文書の記録と変わらない文書の側面から見ても、四半世紀、半世紀の推移では「証人」が健在であり、生きている記憶と記録に大きな違いが生じないことを考えさせられる。かつて、エバレット・ハリソンが新約の記録のプロセスについて語っていたことを新たに思い起こしている。聖書には真正面から向う姿勢が求められる。

六、歴史の継承

その中にはすでに眠った者たちもいる

(Iコリント一五章上)

主権をもって導かれる神の恵みにより、創立以来、二十年の成長と歩みを続けて来られたことを神に感謝し、賛美を献げるものである。それと共に、本学会の設立準備の段階から、今日に至るまで活動の要となつてご奉仕を下さつた方々に、感謝を表明し、お喜びを述べる次第である。発起人六十六人から始動した本会員は、今日では四〇〇を越え、東部、西部、中部々会に加えて各地区の活動も具体化しようとしている。

二十年の歳月は歴史としてはあまりにも短かいにもかかわらず、創立時からの理事、今野氏を、また先には西部で活躍された山中氏、名誉会員としての車田氏、安藤氏が既に天の記録に移されている。福音は人によって担われると同様、神学の作業も人によるいとなみである。全会員が参与する神学会を目指し、会員(教会の担任教師・牧師)を通して、日本の福音教会の成長に寄与することを切に願うものである。

本学会は、その目的と前提の故に誠にユニークな構成員から成っている。このような広がりを持った会員層による

「学会」は他に類を見ないのではななかろうか。「会員」は本会の目的に賛同する神学教師、牧会伝道に従事している教職、宣教師、及び信徒の研究者……神学生、及び信徒……神学校、及び諸団体である。従って、その事業活動と運営の難かしさは想像に難くない。しかし、その困難さを超越する崇高な目的（神学的研究、相互交流、教会の健全な成長と発達に奉仕）の故に、自から克服しなければならぬ。既にヒルトナーの首唱するように「われわれの神学研究の対象である神学的な事柄 (theologische Sache) は、ふた通りの仕方です、つまり理論的に、そして実践的に取り扱われることを要求している」^⑧のであるから、本神学会は「論理中心領域」と「行為中心領域」とに学究を展開することができると共に、常に「聖霊的 (pneumatologisch)」な場において認識する特権を備えられているのである。全会員の参与する目的論的な活動が今後の課題である。前者においては、真に福音主義神学と称する神学的パラダイム——聖書解釈学原則を求め、後者において、聖霊の証印を得て教会成長と発達に寄与する事業の展開を期待したい。最後にレイ・S・アンダーソンの“A Theology for Ministry”の命題を引用して擧筆したい。“All ministry is God's ministry…… ministry precedes and produces theology, not the reverse.”^⑨

「すべてのミニストリーは、神のミニストリーである……ミニストリーは神学に先行し、そして神学を生む。その逆ではない」（筆者訳）。

しかし、神の恵みによって、わたしは今日あるを得ているのである（パウロ、Iコリント一五章一〇）。

「追補」

第一回と第二回神学研究会の間

1、一一号より一五号までの論文

「救済史的理解をめぐって（上沼氏）一一号。

「パウロ・ティリッヒの『救し』の理解について」（大滝氏）一一号

「キリスト者と非キリスト者の学的思惟における『対立の原理』（春名氏）一一号。

「BHS、その本文の性格と問題点——レニングラード写本とヒブリアヘブライカ・シュトゥットガルテンシアをめぐる諸問題への考察」（本間氏）一一号。

「アケダと新約聖書の救済論」（清水氏）一一号。

「親切な雇主の譬え——イエスの言葉の真止性についての一考察」（内田氏）一一号。

「キリスト論的称号の扱いに見るルカの姿勢」（五島氏）一一号。

「詩篇八篇を一例として」（鍋谷氏）一一号。

「現代神学における摂理論とその周辺」（高力）一一号。

「日本文化の特色とキリスト教との関係」（ソールハイム氏）一一号。

「第四福音書における十字架」（三上氏）一四号。

「死にゆく人々への牧会配慮」（窪寺氏）一四号。

「福音と異教文化の接点を求めて」（久保田氏）一四号。

「LとBHS、その本文の問題点と分析」（本間氏）一四号。

「靈感の用語と概念——用語整理のための覚え書」（舟喜氏）一五号。

「実践的適用（釈義と説教）——新約聖書における旧約聖書の引用問題をめぐって——」（詩篇一篇と使徒行伝四章一四

- 〔三〇〕(石丸氏) 一五号。(創世記一章二、申命記二四章一〜四、マタイ一九章三〜二二)(油井氏) 一五号。
 「聖典としての聖書―聖書の説教と教会形成をめざして―」(斉藤氏) 一五号。
 「内村鑑三の聖書観―福音的聖書論への序論的一考察―」(橋本氏) 一五号。
 2、シンポジウム「福音主義の立場に立った聖書釈義の諸問題―その方法論と展開―服部氏外) 一一号。
 「救済史の問題について―聖書記述に『救済史』は認められないのか?」(服部氏) 一一号。
 「聖書神学と救済史」(安田氏) 一一号。
 3、講演「科学とキリスト教認識」(稲垣氏) 一五号。
 「福音主義神学の今日的課題」(宇田氏) 一七号。
 「神の言葉と説教」(入船氏) 一七号。

註

- ① 『福音主義神学一』(日本福音主義神学会、一九七〇年) 一一三頁。「神の摂理のうちに誕生した日本福音主義神学会」村瀬俊夫氏の序文より。以後『学会誌一』と表記する。
 ② TPC編集委員会編『聖書と宣教』(日本プロテスタント聖書信仰同盟) 一一二頁。
 ③ 『学会誌一』 一一四頁。
 ④ 『学会誌二』 四九頁。「教会の死と復活―現代へのメッセージを失ったキリスト教―」泉田昭氏。
 ⑤ G・ウイニングレン『現代神学序説』(聖文舎、一九六九年) 三三頁。
 ⑥ Edward J. Carnell, *The Case for Orthodox Theology*, (Philadelphia: Westminster Press, 1959) p. 33.
 ⑦ 『学会誌一』 vii—xxxiii.

- ⑧ 『学会誌一五』 一頁。
 ⑨ 『学会誌一七』 四〇頁。
 ⑩ 加藤常昭『福音主義教会形成の課題』(新教出版社、一九七三年) 三―八頁より引用。
 ⑪ Rey S. Anderson, ed. *Theological Foundations For Ministry*. Grand Rapid Mich.: Eerdman Pub. Co, 1979, p. 7.
 (中央聖書学校・教授、中央福音教会・牧師)